

ずいそう

下手の横好き

深川 良一



どうもこの「ずいそう」もゴルフの話題は多そうで、ゴルフをされない方には申し訳ないが、ご容赦願いたい。ゴルフを始めたのは遅かったが、今は「下手の横好き」といわれる位には成長？したかもしれない（実際口の悪い国交省の友人がそう言っているのを聞いたことがある）。平成元年に西オーストラリア大学に1年間滞在する機会があり、半年過ぎ位からゴルフを始めた。滞在もあと半年か、ということで、何か勿体無いような気がしたのである。オーストラリアもゴルフ大国で、ゴルフを楽しむ人の数はかなり多い。大半は庶民で、金持ちはマリンスポーツがメインであるような。何よりも安いゴルフ場が至るところにあるのが有難かった。時々車で遠出したが、かなり小さな町にもゴルフ場があり驚いた。最初良くプレーしたのはパースの町中にあるウェンブレというパブリックコースだった。早朝からプレーすることが可能で、1週間に1回くらいは早朝6時ごろからハーフ回り、8時半ごろそのままそう遠くない大学の研究室に出る、という生活を送った。研究室に行くと、同僚に「またゴルフか」と冷やかされ、なぜ分かったのだろうと尋ねると「ズボンのすそが濡れている」とのことだった。早朝のゴルフ場が素晴らしいのは、朝露に濡れたフェアウェーやグリーンに自分一人がその日初めて足跡やボールの痕跡を付けられるからだった。まるで処女地のような静かな広いゴルフ場を一人カートを引いて（まっすぐではなく）歩く、というのは得がたい経験だった。何か深い哲学的思索にふけたような気もするが、思い出せない・・・。

オーストラリアのゴルフ場が面白いのは、少し郊外なら動物がわんさか出てくるということもある。カンガルー、ダチョウ風のエミューなどは勿論、ブッシュに入ったボールを捜していると三角頭の30cm位はありそうなかげを見つけてびっくりした。また、マグパイという攻撃的な鳥は怖かった。人の目をついてくるということで、最後のころ当時1歳と3歳の子供たちもカートに乗せて回っていたが、家内とクラブを振り回して必死で防戦した。また、オーストラリアは山火事が多く、夏期には至る所で山火事が発生しており、ゴルフ場も例外ではなかった。プレーの途中で山

火事のために中止になったことが2、3回あった。1回などは煙に巻かれそうになって命からがらクラブハウスまで辿り着いた。

帰国してから既に16年経過したが、プレーは年平均5、6回くらいだろうか。残念ながらプレー料や仕事の関係で、そう頻繁にはできない。しかし、オーストラリアで味わったゴルフへの思いはまだ変わることなく続いているように思う。その理由の一つは、帰国後に読んだ夏坂健氏の一連のゴルフエッセーである。夏坂さんは既に亡くなられたが、古今東西のゴルフに関する資料を集め、いくつかの国ではゴルフが一つの文化であることを滋味豊かな上品な文章で表現されている。びっくりするような失敗談、成功談、スーパースター達などに関するエッセーも面白いが、イギリスの片田舎のゴルフに凝るおじさんの話などがもっと面白い。まさに文化を感じさせる。ゴルフ場近くに居を構え、早朝一人カートを引いて家を出て、そのままゴルフ場でプレーする、なんてのは私の中ではいつのまにかユートピアになってしまっているが、これも夏坂さんの影響かもしれない。プレー中に少ししんどくなって木陰に横たわり、人生を振り返りながら、そのまま息絶えるという死に際までストーリーとして出来上がっているくらいだ。

日本でオーストラリアと同様なゴルフ生活を送るといのは至難の業かもしれないが、私を見るところ夏坂さんの愛した本当にゴルフの好きな人は増えているような気がする。一方ゴルフ業界には逆風が吹いている。同じ大学の友人は食糧生産に建設業のノウハウを生かそうと頑張っているが、経営の難しいゴルフ場を近代的な食生産システムの変換したらどうかと真剣に考えている（彼はゴルフはやらない）。こんな逆風の中ではあるが、日本にも一つぐらいゴルフ中心の町があっても良いような気がする。町中に大きなゴルフ場があり、生活の場に自然とゴルフが溶け込んでくるような町である。そろそろ日本でもゴルフが文化の域に到達しても良いのではと思うがいかがだろうか。